

「第3回幼児教育・保育  
についての基本調査」より

# 幼児教育の 「今」と「これから」 を読み解く



白梅学園大学大学院 特任教授

**無藤隆**（むとう・たかし）先生

白梅学園大学元学長。文部科学省教育課程部会幼児教育部会主査のほか、文部科学省中央教育審議会委員などを歴任。専門は発達心理学・教育心理学。著書に「保育の学校（全3巻）」（フレーベル館）など。

近年、園をとりまく環境はめまぐるしく変化しています。ベネッセ教育総合研究所では、全国の幼稚園・保育所・認定こども園<sup>\*1</sup>の協力のもと、園の環境・体制や教育・保育活動などを明らかにすることをめざして「第3回幼児教育・保育についての基本調査」（以下、基本調査）を行いました。2012年の前回調査（以下、12年調査）からさまざまな変化が見られ、保育現場の実態や課題が浮き彫りになっています。監修者の代表である白梅学園大学大学院特任教授の無藤隆先生に、特に注目したいポイントと課題解決に向けたヒントをうかがいました。

## 多様化するニーズに応え、 園の新たな形を模索

少子化や、乳幼児をもつ共働き世帯の増加、保育所入園時期の低年齢化という社会背景の中、子ども・子育て支援新制度の導入や幼稚園教育要領・保育所保育指針等（以下、要領・指針）の改訂（定）、2019年10月からの幼児教育・保育の無償化などの影響を受けて、幼児教育のしくみは今後、さらに変化すると考えられています。

基本調査の結果からは、乳幼児の預かり

に関するニーズや、保護者が情報を得て互いに交流する場としてのニーズなど多様化する社会的ニーズに対して、園がさまざまな工夫で応えようとしている姿が浮かび上がりました。また、要領・指針への対応や、近年、顕在化している特別な支援を必要とする子どもへの対応などの課題に真摯に向き合い、保育者の資質向上をめざしながら、研修などの体制を整えようとしている姿も見られます。

以下、特に注目したいデータを取り上げ、現場の実態と結びつけて解説していきます。

\*1 文中の認定こども園は、「幼保連携型認定こども園」を指します。

## ●園の開所時間

### 保育時間の長時間化が進む

幼稚園・保育所ともに12年調査に比べて開所時間が長くなっており（図1）、実質的な保育時間も伸びていると考えられます。保育所では都市部を中心に長時間保育へのニーズが依然として高く、幼稚園でも預かり保育の増加（P.4 図3）が影響しているようです。認定こども園の開所時間も、保育所と同程度です。今後は幼児教育・保育の無償化により、園種を問わず、長時間化が加速すると予測されます。

保育の長時間化により、保育者不足の問題が深刻化するでしょう。ただでさえ足りないのに、朝や夜の時間帯はますます保育者が集まりづらく、結果的に一人ひとりの勤務時間が延びる状況も懸念されます。

こうした問題は園だけで解決することは難しく、行政による保育者の待遇改善などの対策が欠かせません。一方、園ができる対策としては、一部の事務や施設管理など、保育者でなくてもできる業務に、補助金を最大限利用するなどして専門スタッフを積極的に雇用することが考えられます。保育者の負担を少しでも軽減できれば、教材準備や研修などの時間を充実させ、資質の向上につなげていくこともできるでしょう。

## ●認定こども園のよさ

### 教育的なよさが肯定的に理解され、全国的に定着

基本調査の結果からは認定こども園が定着

図1 開所時間の長さ（経年比較・平均）

		12年調査	18年調査
幼稚園	国公立	7時間9分	7時間29分
	私立	9時間21分	9時間29分
保育所	公営	10時間57分	11時間25分
	私営	11時間51分	12時間2分
認定こども園	公営	—	11時間24分
	私営	—	11時間50分

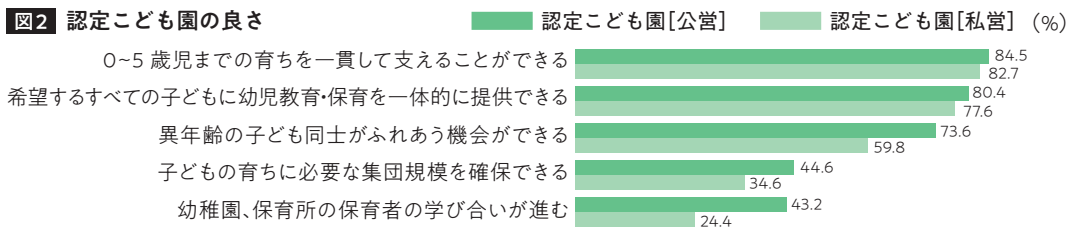
※各園の預かり保育や延長保育も含めた最も早い保育の開始時刻と最も遅い保育の終了時刻を採用し、（終了時刻）－（開始時刻）で開所している時間の長さを算出  
※無答不明を除いて集計  
※園の区分ごとに開所時間の長さの平均を算出

し、これからも増加が見込まれることが確認できました。単に設置が進んでいるだけではなく、「認定こども園の良さ」を聞いた設問（図2）に対し、「0～5歳児までの育ちを一貫して支えることができる」「希望するすべての子どもに幼児教育・保育を一体的に提供できる」「異年齢の子ども同士がふれあう機会ができる」といった回答が上位を占め、認定こども園の教育的なよさが肯定的に理解され、社会的ニーズに応える存在として確立されつつあることがうかがえます。

認定こども園の定着に伴い、従来は幼・保のいずれかに分かれていた子どもたちが同じ園で過ごすようになりました。少子化により子育て世帯の近所づき合いが希薄化する中、地域の保護者同士がつながりをもつことができるといったよさにもつながるでしょう。

認定こども園では当初から幼・保の機能の融合が課題でしたが、職員室を1つにしたり、一緒に研修を行ったりする工夫で改善が進んでいます。多様化する社会的ニーズに応えていくために、今後、認定こども園の役割はさらに重要になっていくでしょう。

図2 認定こども園の良さ



※複数回答  
※公営の降順で図示  
※「その他」を含めた11項目のうち上位5項目のみ図示

## ■「第3回 幼児教育・保育についての基本調査」の調査概要

調査テーマ：環境や政策の変化の中で、幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園の幼児教育・保育の取り組みや課題にはどのようなものがあるか

調査対象：園児数30人以上の国公立・私立幼稚園、公営・私営認可保育所、公営・私営幼保連携型認定こども園の園長等（※）  
※園長・所長・施設長、副園長（教頭）・副所長・副施設長、主任等

調査方法：郵送法（自記式質問紙を郵送により配布・回収）

調査時期：2018年11～12月 調査地域：日本国内全域

発送数：16,037園 有効回答数：4,565園（有効回答率28.5%）

調査項目：環境や設備／保育者の状況／教育・保育目標／要領・指針への対応／教育・保育活動／子育て支援／保育者研修／保幼小接続／園の運営上の課題／保護者とのコミュニケーション等

## ●幼稚園の預かり保育、2歳児保育の実態

### 受け入れ規模に応じた 保育計画を立てていきたい

幼稚園においても、私立を中心に預かり保育を実施したり（**図3**）、2歳児を受け入れたり（**図4**）することが増えています。保護者のニーズの高まりを背景に、午後の遅い時刻まで子どもを預かることが常態化している幼稚園もあり、子どもたちをただ預かるだけではないしくみをつくる必要があります。通常時のクラスとは違う、異年齢の子どもの集まりとなるので、それに応じた保育計画が必要でしょう。

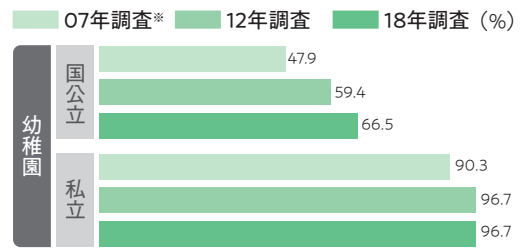
2歳児に関するニーズも高いですが、幼稚園が正規に2歳児を受け入れるには法改正が必要となるため、見通しは不明瞭です。当面は預かり保育の形態で、2歳児を受け入れる幼稚園が増えていきそうです。ただ、そうして2歳児保育に関する経験とノウハウを積み上げていけば、子どもの育ちはつながっていきますから、3歳児以降の保育にも大いに生かされるに違いありません。

## ●子育て支援

### 幼稚園・保育所でも 子育て支援の拡充が進む

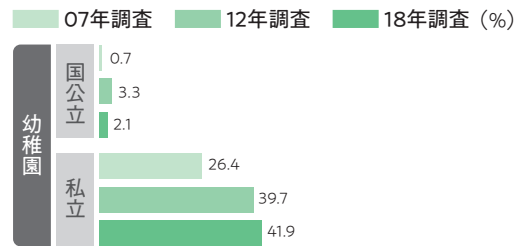
子育て支援が義務づけられている認定こども園だけでなく、幼稚園や保育所においても

**図3 預かり保育の実施(幼稚園・経年比較)**



※「実施している」の％  
※第1回調査は2007年に幼稚園対象、2008年に保育園対象に実施

**図4 2歳児受け入れの有無(幼稚園・経年比較)**

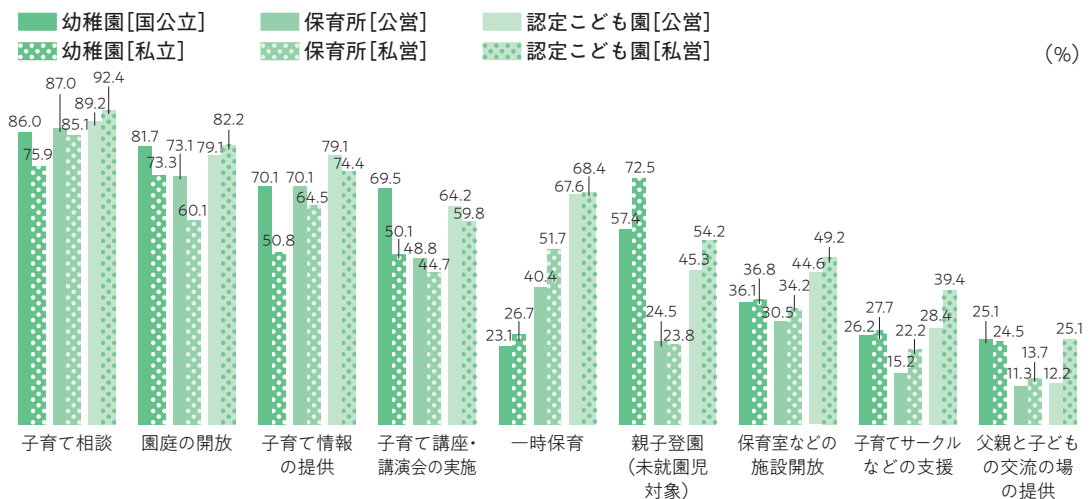


※「受け入れている」の％

その取り組みが広がっている様子が見られました（**図5**）。「(保護者自身の)話し相手ほしい」「子どもの発達について相談したい」「他の子どもと交流する機会をもたせたい」などの理由から、子育て支援に対する保護者のニーズがとても高まっています。

調査結果を見ると、子育て相談や園庭の開放を行う園が多いですが、一時保育や未就園児の親子登園などの充実も望まれます。子育て中は一時的に子どもを預けたり、保育者や他の保護者との交流を望んだりする状況があるからです。受け入れ環境の整備が難しい場合もあると思いますが、可能な限り対応すると、より効果的な子育て支援になるでしょう。

**図5 園が実施している子育て支援活動の内容**



※複数回答  
※「在園児の保護者」「地域の保護者等」のいずれかまたは両方に対して行っていると回答した％

図6 教育・保育の目標として特に重視していること

(%)

	幼稚園		保育所		認定こども園	
	国公立	私立	公営	私营	公営	私营
● のびのびと遊ぶこと	① 35.3	③ 29.8	③ 32.3	26.4	③ 35.1	27.2
● 健康な身体をつくること	② 32.5	27.3	① 45.8	① 39.8	① 39.9	② 33.7
● 基本的な生活習慣を身につけること	25.7	② 32.1	32.0	③ 34.0	② 37.8	③ 28.4
自分のことは自分ですること	5.4	7.5	5.8	6.3	3.4	7.8
自然とふれあうこと	5.9	8.3	8.7	9.7	5.4	10.8
● 遊びの中でいろいろなものに興味をもつこと	30.5	24.9	28.6	28.8	24.3	26.6
● 友だちを大事にし、仲良く協力すること	29.2	22.6	23.0	20.7	13.5	17.1
思ったことをはっきり話し、人の話をよく聞くこと	18.5	14.2	14.4	12.6	20.9	10.8
礼儀作法を身につけること	0.0	3.7	0.2	1.8	0.7	2.2
● 人への思いやりをもつこと	28.5	① 35.5	② 39.5	② 35.8	32.4	① 33.9
● 考える力を養うこと	③ 32.0	23.2	19.6	21.9	29.1	26.4
粘り強く挑戦すること	13.9	9.8	3.9	6.0	7.4	8.1
文字や数を学習すること	0.0	0.8	0.1	0.5	0.0	0.8
国際感覚を養い、外国語に親しむこと	0.0	1.0	0.0	0.7	2.0	1.8
● 豊かな情操や感性を育むこと	19.1	23.0	21.4	21.9	23.0	25.7
五感を使って表現すること	2.1	3.7	3.1	5.0	2.7	4.3
個性を伸ばすこと	1.8	4.5	1.2	2.5	1.4	4.0

※複数回答(3つまで)  
 ※「その他」を除いて図示  
 ※園の区分別に選択率の上位3項目に①～③と図示  
 ※園全体を母数として選択率が20%以上の項目に●をつけている

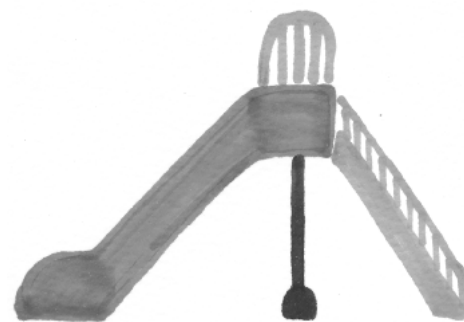
●要領・指針への対応

要領・指針への理解は進んでおり、  
 今後は実践を深めることが課題

要領・指針の改訂(定)を受け、約7～9割の園で要領・指針についての研修・勉強会の機会がもたれていました。また、約6割以上の園で、教育課程・全体的な計画の編成が見直されています\*2。

園で重視している教育・保育の目標を見ると(図6)、園種を問わず「のびのびと遊ぶこと」「健康な身体をつくること」「人への思いやりをもつこと」などが高くなっています。遊びや思いやりを大切にする保育は、国際的にも日本の特徴といえますが、これらに加え、「考える力を養うこと」や「豊かな情操や感性を育むこと」といった資質・能力の育成に関する目標も徐々に重視されつつあります。

そうした方向性は要領・指針で打ち出された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)とも重なり、教育・保育目標の面でも要領・指針を踏まえて設定されていることがわかりました。次の段階としては、これらの実践を深めていくことが求められます。



●特別な支援を必要とする子ども

「特別な支援を必要とする子ども」に関する研修を望む声が多数

園種を問わず、特別な支援を必要とする子どもが経年で増加し(P.6 図7)、その理解や保育に関する研修が必要と考える園が多いことがわかりました(P.6 図8)。

要因の1つには、具体的にどう支援をすればよいかという理解が十分でないことがあるでしょう。保育者の養成課程でも学ぶ機会がありますが、どうしても抽象的・一般的な内容となり、保育の現場で子ども一人ひとりの個性に対応できるような力をつけるのは困難です。また、以前に比べて発達障害などに関する研究が進み、保育者が知っておくべき内

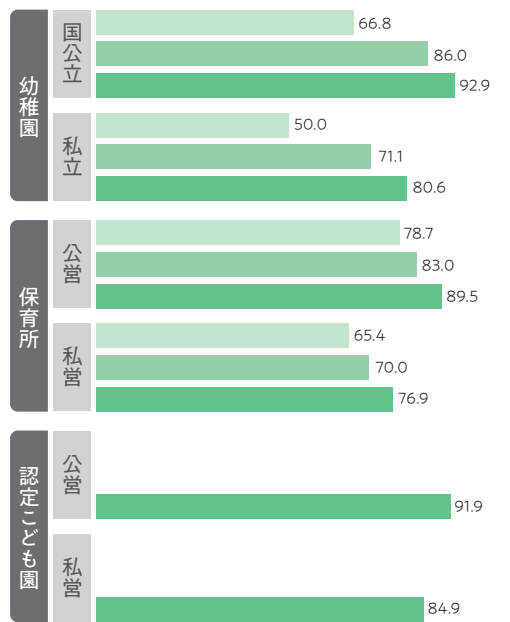
\*2 「第3回 幼児教育・保育についての基本調査」の報告書(P.14)をご参照ください。ベネッセ教育総合研究所ウェブサイトよりダウンロードいただけます。



容が増えていることも要因に挙げられます。

園には集団で過ごすことが苦手な子どももいますから、担任だけでクラス全員を見るのは容易ではありません。その解決のために保育者をもっと増やしたいと考えても、現実には人員不足や補助金の問題により難しい場合も多いでしょう。こうした状況下で現場の先生方が困っている様子が調査結果からも見て取れます。⇒「特別なニーズをもつ子どもと保育」に関する解説と事例は P.8～16 参照

図7 障がい・特別に支援を要する園児(経年比較)  
07/08年調査 12年調査 18年調査 (%)



※「いる」の%  
※経年比較は幼稚園・保育所のみ

●園の課題

「保育者の資質の維持、向上」が多くの園で課題の上位に

園の保育実践上、運営上の課題に関する設問には、園種を問わず約5割が「保育者の資質の維持、向上」を挙げました(図9)。保育現場を見ると、研修を行ったり、記録に基づいて実践を改善させたりなど、保育者の資質を高める取り組みは徐々に広がっていると感じます。保育士のキャリアアップ研修が始まったこともその一助となっているでしょう。しかし、多忙化などの影響もあり、十分に対応できていないのが実情のようです。

保育者の成長を促すには、「保育者の資質の向上のために必要なこと」の設問でも上位に挙げた「保育者同士が学び合う園の風土づくり」が欠かせません(図10)。最近では、保育者として長く勤める人や、別の仕事を辞めて新たに保育者になる人が増えました。さまざまな社会的経験をもつ幅広い年齢層の保育者が、一緒に学んでいく風土づくり、そのためのしくみづくりがとても重要です。保育者が互いの保育を見合ったり、話し合ったりする時間を積極的に設けて、一人ひとりの成長を支えられるようにしていきましょう。そのために勤務時間の調整をするのは、園長先生の役割です。

図8 保育者にとって特に必要だと思う研修の内容(園の区別に上位5項目)

(%)

	幼稚園		保育所		認定こども園	
	国立	私立	公営	私営	公営	私営
1位	特別な支援を必要とする子どもの理解や保育 89.4	特別な支援を必要とする子どもの理解や保育 81.5	特別な支援を必要とする子どもの理解や保育 86.4	特別な支援を必要とする子どもの理解や保育 78.8	特別な支援を必要とする子どもの理解や保育 89.9	特別な支援を必要とする子どもの理解や保育 80.9
2位	小学校との連携、接続 74.4	子どもの成長・発達についての理解 68.2	乳児(0~2歳児)の保育の内容、方法 71.1	乳児(0~2歳児)の保育の内容、方法 76.7	子どもの成長・発達についての理解 77.0	乳児(0~2歳児)の保育の内容、方法 73.9
3位	子どもの成長・発達についての理解 69.1	実技演習(運動遊び、表現活動、自然体験等) 58.1	子どもの成長・発達についての理解 71.0	子どもの成長・発達についての理解 74.7	幼児(3~5歳児)の保育の内容、方法 75.0	幼児(3~5歳児)の保育の内容、方法 71.3
4位	実技演習(運動遊び、表現活動、自然体験等) 66.0	保護者とのコミュニケーションスキル 52.3	幼児(3~5歳児)の保育の内容、方法 68.5	幼児(3~5歳児)の保育の内容、方法 74.3	乳児(0~2歳児)の保育の内容、方法 70.9	子どもの成長・発達についての理解 70.8
5位	保護者とのコミュニケーションスキル 56.6	幼児(3~5歳児)の保育の内容、方法 50.1	実技演習(運動遊び、表現活動、自然体験等) 63.3	保護者とのコミュニケーションスキル 63.9	小学校との連携、接続 68.2	保護者とのコミュニケーションスキル 61.8

※複数回答  
※「その他」を含めた21項目のうち、区分ごとに上位5項目のみ表示

図9 園の保育実践上、運営上の課題(園の区分別に上位5項目)

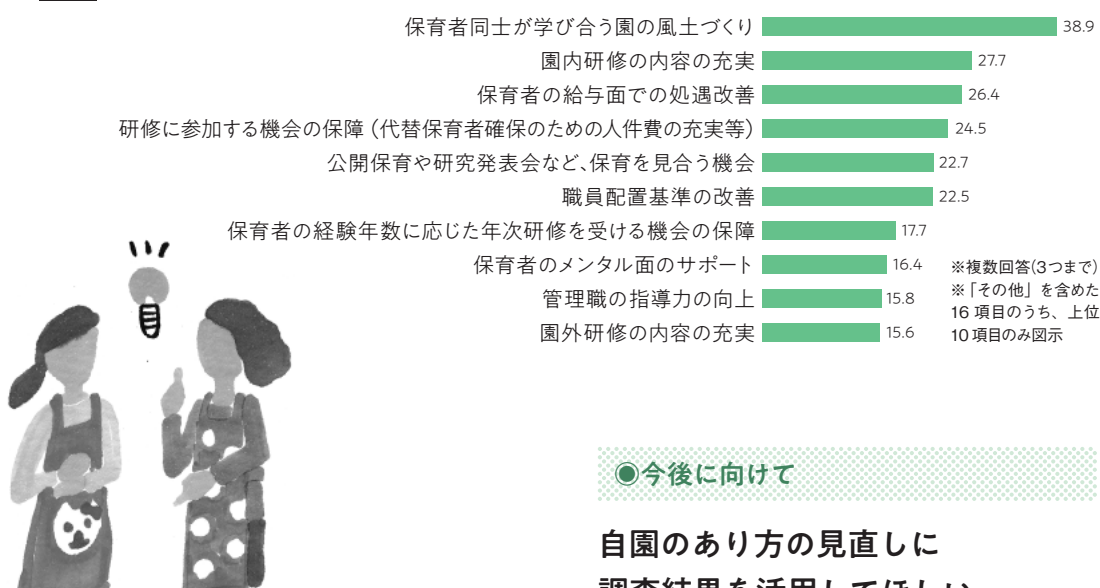
(%)

	幼稚園		保育所		認定こども園	
	国公立	私立	公営	私营	公営	私营
1位	保育者の資質の維持・向上 52.0	保育者の処遇改善 49.4	保育者の資質の維持・向上 52.3	保育者の資質の維持・向上 48.9	保育者の定着・確保 52.0	保育者の資質の維持・向上 52.8
2位	新たな園児の獲得 * 3位と同率 47.2	保育者の定着・確保 46.5	保育者の定着・確保 47.0	保育者の定着・確保 47.2	保育者の資質の維持・向上 50.7	保育者の定着・確保 51.3
3位	保育内容・方法の充実 * 2位と同率 47.2	保育者の資質の維持・向上 46.3	施設・設備の充実 44.3	保育者の処遇改善 45.0	保育者の処遇改善 45.9	保育者の処遇改善 43.9
4位	障がいのある子ども・特別に支援を要する子どもの対応 46.9	新たな園児の獲得 45.3	保育者の処遇改善 43.1	管理職の指導力の向上 41.7	保育内容・方法の充実 35.8	管理職の指導力の向上 39.5
5位	適正な規模の園児数の維持 42.9	予算(補助金、保育料など)の確保 43.4	管理職の指導力の向上 40.0	保育内容・方法の充実 37.1	施設・設備の充実 31.1	保育内容・方法の充実 38.4

※「とてもあてはまる」の%  
※ 20項目のうち、園の区分ごとに上位5項目のみ表示

図10 保育者の資質の向上のために必要なこと(園全体)

(%)



### ●今後に向けて

#### 自園のあり方の見直しに 調査結果を活用してほしい

園長先生のオープンな態度も、園内に良好な雰囲気をもたらします。リーダーとして方向性を示すことは大切ですが、すべてがトップダウンになると保育者はなかなかついてきてくれません。若手を含めた保育者の話を聞き、意見を引き出すとともに、ミドルリーダーが活躍できる体制をつくることで、保育者同士が自由に語り合える雰囲気が生まれやすくなります。そうした環境ができると、一人ひとりの仕事への満足度も高まります。

ほかにも、保育者の資質向上に役立つ研修を、継続的に実施できるしくみの安定化も必要です。研修を勤務時間内に組み込んだり、オンライン研修を取り入れたりして、必要な研修を受けやすくしていく工夫が求められます。⇒「保育者の資質向上を支える園の体制づくり」に関する解説はP.17～21参照

認定こども園が定着したり、幼稚園の預かり保育や2歳児保育が増えたりなど、社会のさまざまなニーズに応じていくと、今後はさらに幼・保が共通化・一体化していくことが考えられます。「幼児期に必要な経験をする場」として、保育の形態や中身が実質的に近づいていくでしょう。

今回の基本調査では、現場の大変さや、今までの保育を変えていく必要性が浮き彫りになった面があります。解決のために考えるべき課題は多いですが、それは保育が専門性の高い、社会的に重要な仕事であるというメッセージでもあると、私は受け止めています。園の先生方には、さらに変化を遂げていくであろう今後に向け、自園のあり方を見直し、取り組みに活かしていくツールとして、調査結果を活用していただきたいと思います。